



## 岩永マキを辿る旅 — 鶴島を訪ねて —

10月の連休を利用して、瀬戸内海に浮かぶ無人島、鶴島に行ってきました。目的は巡礼と、そこで毎年行われている記念ミサに参加するためです。岩永マキは聖マリア病院の経営母体である「お告げのマリア修道会」の創立の時のメンバーです。岩永マキの足跡を辿るといっても大きな目的でした。

1549年に伝来したキリスト教は、38年後の1587年に豊臣秀吉によって禁教令

が出され、江戸幕府、明治政府もこの政策を引き継ぎました。この禁教令の間は、キリシタンと分かると棄教を迫られ迫害されたのでした。約250年の時を経て、もう日本にはキリシタンはいないと思われていましたが、幕末に外国人神父が日本にやってくると、浦上に潜んでいたキリシタンたちが神父の元を訪れ、キリシタンであることを表明したのです。この出来事は「信徒発見」と言われ、現在カトリック教会ではこの出来事を記念しています。しかし



これをきっかけに、浦上四番崩れという過酷な迫害が始まったのでした。それは浦上村の全村民が日本の各地に流刑にされるというものでした。そこで拷問を受けたり、重労働を課せられたりしたのでした。鶴島もその流刑の地なのです。

岩永マキは浦上村で生まれ育ったキリシタンでした。20歳くらいの時に浦上四番崩れが起こり、捕らえられて鶴島に流されました。現代を生きる私には想像もできないような過酷な生活を送りました。1873年(明治6年)になってやっと禁教令が解かれ、キリシタンは自由になりました。岩永マキも流刑の地を発ち、何と岡山から歩いて浦上まで戻ってきたようです。しかし4年の月日が経っており浦上は荒れ放題、家も家財道具もない状態からの再出発でした。そんな折、長崎に赤痢や天然痘が流行。また「戌年の暴風」と名付けられるほどの大きな台風が襲い、再建しかけた家や農作物も全滅するという災難に襲われます。

次から次に襲ってくる災難の中であつて、岩永マキを含む四人の流刑から戻ってきたキリシタンの女性たちは、フランス人神父に協力して、伝染病の救護活動を始めました。自分たちが感染するかもしれないので、家族と離れ合宿生活をしながら、活動を行いました。そして伝染病が収束した時、マキたちのもとに親を亡くした子どもが残されていました。マキたちはこの子どもを自分たちで育てるという決意をしました。他にも孤児や捨て子が多い時代で、たくさん子どもたちを、合宿生活を続けながら育てたのでした。これが日本の児童養護施設の始まりで、そして女性たちの生活は後にお告げのマリア修道会となったのです。

右)20代後半の岩永マキ



下)岩永マキと浦上養育院

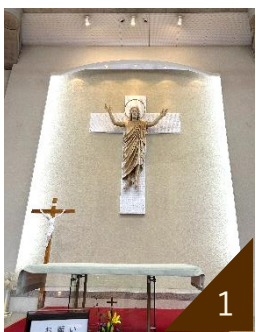


岩永マキは20歳で流刑にされ、4年間離島で囚人として生活し、24歳で浦上に戻り、その後伝染病の救護活動、孤児・捨て子を育てる事業を開始し、亡くなるまで続けました。マキはどんな気持ちでそのような人生を送ったのか。私なりにマキの心を辿りました。揺るがぬ信念、それは神様への信仰に他なりません。いつその信念を持つことができたのか、何がそうさせたのか。鶴島でミサに参加しながら、流刑地で命を落としたキリシタンたちのお墓の前で祈りながら考えました。でも私には容易には分かりません。ただ想像するに、自分たちの周りで困っている人を見ることができなかつた。その人達のために自分たちが何かできることがあるなら、やら

ずにいることはできなかつたのではないかと思いました。そしてそこには諦めない決意、徹底さがあつたように感じます。その諦めない徹底さを私は学ばなければならぬと思いました。

岩永マキを辿る旅を終えて、マキはしあわせを感じて過ごしていただろうと思いました。自分のために何も残さない、すべて神様のため、人のために差し出す、それがどんなに清々しいものかを味わっていたのでしょうか。苦しさの中で迷いや不安もあつたでしょう。それがなくなることはありません。それでよい、その中から希望を持って決断し進んでいこう、そのように教えられた旅でした。

院長 山中淳子



1. カトリック岡山教会の復活のキリスト
2. 岡山藩に預けられたキリシタンが収容された本行寺
3. 鶴島の中央の丘に続く石地の道
4. カトリック広島教区 白浜司教司式によるミサ
5. 浦上キリシタン殉教者碑を囲んで





### 鶴島巡礼の体験を通して

3日間の研修を通して、自分のいる環境がどれほど恵まれているのかを改めて感じました。岩永マキという人は、生きていくことが精一杯の時代に、仕事までして、それでも弱音や愚痴ひとつこぼさずに生活していたことを知ってすごいと思いました。

私は、聖マリア病院の理念に感銘を受けて、入職することを決めていました。就職して2年目になり、慣れてきたところがあり、相手のことを思って看護ができているか、考えるきっかけとなりました。今回、巡礼をした方々とは宗教は異なりますが、たくさんのことを学ぶことができました。もう一度、病院理念を読み、自分の言動を見直し、患者様に寄り添うことのできる看護師になれるよう、これからもがんばります。貴重な体験をありがとうございました。

（看護師 梅本 雪乃）

今回、鶴島巡礼に参加させていただき、この島で壮絶な思いをしてやっと浦上に帰ってきた岩永マキについて学ぶことができました。マキたちが、そこでどのような生活だったのか、想像するだけでもつらいと思いました。そんな体験をしながらも、自分たちだけでなく、孤児たちを思って行動したこと、それが今にまでつながる取り組みだったということを知り、奉仕を捧げるすごさを感じました。私は自分のことで精一杯で、まだまだ不十分ですが、今回の学びを忘れずに、患者様、ご家族にとっての看護を考えるとときの糧にしていければと思います。

（看護師 熊川 凜桜）

## 助祭研修プログラム

長崎大司教区からの依頼を受け、司祭養成プログラムの一環として、医療福祉についての講義と実習が、奥浦慈恵院と聖マリア病院で行われました。以下は研修を終えた助祭、洪さんの感想です。



### 主の平和


8月に予定していた医療・福祉の助祭研修は、予定が合わず、9月13日にやっと行われました。激務の中でわざわざ時間を割愛してくださったシスター山中淳子、シスター入口里子に感謝いたします。

午前の研修は、慈恵院を訪ねて、慈恵院や聖マリア病院の歴史および慈恵院の現状についてシスター入口の説明を聞きました。午後からは聖マリア病院を訪ねて、シスター山中から聖マリア病院の歴史と現状を聞き、施設見学や患者さんとの面談を行いました。

聖マリア病院の歴史の説明の時間に、慈恵院の初めのころ、おとめたちがキリストのため、また貧しい隣人のため、冷たい社会の目線を耐えながら、自分のすべてをささげたことを聞きましたが、彼女たちの献身的な信仰に感動しました。また、聖マリア病院の看取りについても聞きましたが、あとで韓国の終末期医療の現状を調べてみたら、韓国では患者本人が在宅を希望しても、万が一のために施設や病院がそれを許してくれないことがわかりました。また終末期医療を受けている患者が、家族から離れて治療を受けているので、病気よりも疎外感や孤独であることに苦しんでいることもわかりました。

今日の日本は、公的な医療・福祉のサービスが整っているので、修道会が医療・福祉施設を運営する必要はなくなったという人もいますが、人間の存在価値が弱まっていく今の時代だからこそ、修道会の精神的、霊的なサポートが必要ではないかと思います。これからも聖マリア病院、また慈恵院の皆さんが、貧しい人、弱い人、孤独な人の支えとなり、その活動を通して、すべての人々に神の国を伝えることができるよう祈っています。

ボナベントウラ 洪 燦基 (ホン チャンキ)

 洪さんは、現在カトリック福江教会で奉仕されています。

## 職員交流バーベキュー会

9月19日 職員の親睦と退職する職員の送別を兼ねた、バーベキュー会を行いました。コロナ禍を経て、今回は4年ぶりの開催となりました。9月とはいえ、日が落ちてからも気温は高く、乾杯の音頭を合図に、準備された冷たい飲み物は勢いよく減り、次第に歓談の声が大きくなっていきました。サザエやアオリイカ、新米にそうめん、ビールなどの差し入れもいただき、豪華な食事となりました。普段は接する機会の少ない部署の人とも交流し、退職する職員へ感謝とねぎらいの言葉がかけられ、盛会のうちにお開きとなりました。



## ロザリオのつどい

10月19日 世界の平和と病床にある人のためにロザリオの祈りを唱えました。数人の患者さんと、修道院のシスター、病院スタッフが集いましたが、いつもの祈りも、同じ意向のためにみんなで唱えると、力が湧いてくるような気がしました。

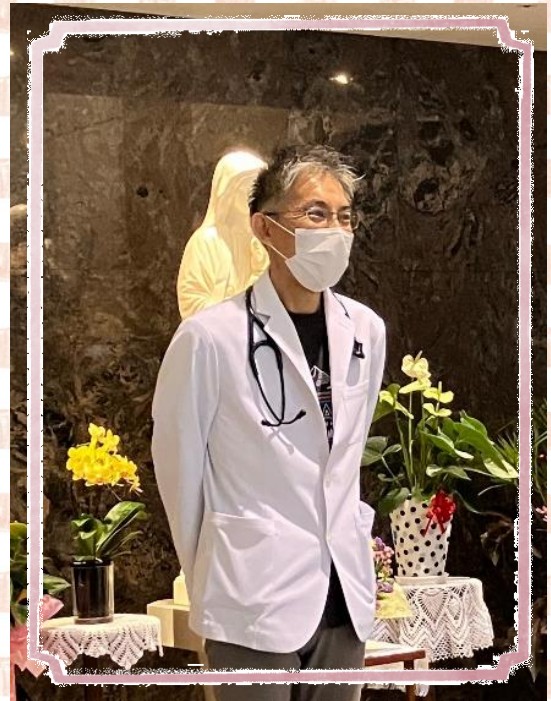




大江先生  
ありがとうございました



久留米聖マリア病院から応援に来て  
いただいていた大江先生が9月末で帰  
任されました。先生は、毎週福岡から  
五島まで通勤するというハードワーク  
にも関わらず、いつも笑顔で患者さん  
や職員と接してくださいました。細や  
かな配慮でたくさん助けていただきま  
した。感謝いたします。



## 充実した日々感謝！

■9月末で出向の期間を終えた理学療法士 池田日向子さんに、五島での生活について語っていただきました。



振り返ってみると、あっという間の3ヵ月間でした。亡き祖父が五島に住んでいたため、小さい頃に何度か訪れたことはありましたが、自分が五島で理学療法士として働く時が来るなんて思いもしませんでした。久留米では実家暮らしで、1人暮らしを今までにしたことがなく、初めての1人暮らしがまさか島になるとは思ってなかったの、とても不安でドキドキしながら7月に五島に来ました。ですが、実際に暮らしてみると、とても景色がよく素敵な場所で、スタッフの皆さん、島の皆さんはとても優しく、今では久留米に帰るのが少し寂しい気持ちです。五島に来る前までは、家の隣にあるガソリンスタンドまでも母についてきてもらっているぐらい1人で行動するのが嫌だったのに、今では車で40分の三井楽まで、1人でちゃんぽんを食べに行けるまで成長しました！

五島聖マリア病院は、地域・患者様に寄り添っ

た病院で、多職種との連携がとてできており、病院全体で患者様に寄り添っているなど感じました。2か月という期間でリハビリを行い、方向性を決め退院するという流れが今までと違い大変でしたが、とてもいい経験になりました。また、五島は超高齢の患者様が多く、患者様に合ったリハビリをしっかりと考え行わないといけないと思いました。地域包括病棟でリハビリをさせていただき、改めてリハビリの必要さ、リハビリの役割について学び、考えることができました。この3ヵ月間で経験し学んだことを活かして、久留米に帰っても患者様に寄り添ったリハビリが行えるよう頑張っていきたいと思います。3ヵ月間本当にお世話になりました。貴重な経験をありがとうございました。

また五島に遊びに来ます！その時は飲み誘ってください！(笑)



## 研修医紹介～はじめまして～



### 大好きな島で

2か月間お世話になります。研修医2年の吉開と申します。福江島は今回が2回目で、1回目は夕焼けマラソンでした。その際に、福江島の大自然や地域の方々の温かさ、ご飯のおいしさに大変驚き、大好きな島になりました。ご迷惑をおかけすることも多々あると思いますが、日々学び、成長したいと思っています。よろしくお願い致します。



吉開 貴仁 先生  
Dr. Yoshigai  
Takato

- ◇出身地…福岡県柳川市
- ◇趣味・特技…マラソン お酒が好きです  
(特にウイスキー)
- ◇志望科…循環器内科
- ◇研修期間…令和6年9月8日～11月2日

### 久しぶりの五島です

五島には、父方祖父の家があり、来島するのは小学校低学年の頃以来ですが、縁あって医師として訪れることができました。病棟管理や一般的な感染症、心不全など、研修医3年目以降対処が必要となる事柄を学びたいです。2か月間、どうぞよろしくお願い致します。

貞方 創志 先生  
Dr. Sadakata  
Soshi



- ◇出身地…福岡県北九州市
- ◇趣味・特技…料理、鉱石集め、ドライブ、観葉植物
- ◇志望科…脳神経外科
- ◇研修期間…令和6年10月6日～11月30日



## 11月と12月の行事



11月8日(金) 防火訓練  
11月13日(水) 追悼のつどい  
11月23日(土) まごころひろば  
11月24日(日) 職場体験フェスタ

12月4日(水) 忘年会  
12月25日(水) クリスマス  
12月23日(土) まごころひろば  
12月30日(月) 仕事納め

次回発行日は令和7年1月1日です。よろしくお願いいたします。



## 今月のイチ押し



早朝、修道院の聖堂の窓から明け方がこぼれます。もうすぐ夜勤が終わる安堵感と倦怠感を美しいグラデーションの夜明けの空が包みます。

### 編集者より

今年は秋の深まりがゆっくりですね。今月号は鶴島巡礼で内容が充実し、増ページでのお届けとなりました。ロザリオの祈りの玄義で、「誤解や侮辱をおそれず信仰に生きることができるよう」という文言を口にするとき、キリスト教徒というだけで罪人として扱われ、不条理な状況の中でもなおキリスト者として生きた人たちを想います。現代でも、どう生きればよいのか迷うことや試される時もあると思いますが、先人の生き方を知り学ぶとき、大きな励ましと知恵をいただく気がします。

(編集者)